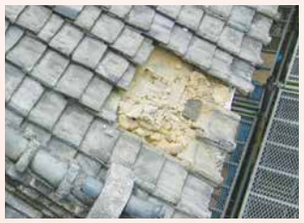
# V 総力をあげて復旧

## 陣屋門修復なる

東日本大震災により被害を受けた県指定文化財「石岡の陣屋門」は、石岡市の中心市街地の歴史的シンボルとして、市民に末永く親しまれてきた。貴重な文化財を後世へ承継するために、震災前の状態へ復旧工事が行われ、平成26年11月30日、無事竣工を迎えることができた。

陣屋門竣工式（平成26年11月30日）



**参考資料**

昭和44年、石岡市民会館の建設に伴い、陣屋門は石岡小学校敷地内に移築された。それから45年の時を経た平成26年、陣屋門は懐かしい場所に帰ってきた。

修復前の陣屋門

# 進む道路整備

路面陥没、段差などの道路被害は 264 箇所におよんだ。学校や公共施設も天井材落下、基礎破損など大きな被害を受けた。市内全域が壊滅的な状況から、市民生活の回復のため、総力をあげて取り組んだ。

高浜地内

大規模修繕がされた道路

石岡駅東

国道 6 号

南台地内

# Ⅵ 復興に向けて

## 市民の元気を結集

3月11日から全てが一変した。東北地方の凄惨な状況を目にし、心を痛めた。以前の元気な市民生活を取り戻すために、一歩ずつ前へ進むしかなかった。震災から約半年後に開催された石岡のおまつりは活気にあふれていた。

東北への祈りを込めて

各地で祭りが中止になるなかで執り行われた

神輿で沸き立つ御幸通り

練り歩く幌獅子（金丸寿通り）

子供たちがおまつりを盛り上げる

石岡郵便局前

心地良いお囃子が夜の街に響く

多くの人でにぎわう石岡駅前

石岡灯籠流し

復興祈念植樹祭

震災復興コンサート

# 明日への祈りをこめて

市内外からのたくさんの援助、そして地域の助け合いにより、少しずつ元の暮らしが戻ってきた。東日本大震災からの地域復興、また東北地方の復興祈念のため、各地で様々なイベントが開催された。

## 3.11の体験を語る

# わたしは忘れない

## 防災マップの充実など地域で守る組織づくりに取り組む

平成18年、石岡市南台二丁目自治会、同自主防災会の会長に就任しました。「安心・安全な街づくり」のため、防災・防犯活動、会員同士の親睦会を設けるなど、尽力してきたつもりでした。しかし、地震発生で予想外の問題に直面し、組織の見直しを痛感させられました。地区は、人的被害はなかったものの、道路の液状化、屋根瓦の落下、塀の倒壊、電気や水道が途絶えるなど、余震が続く中での非常事態に置かれました。どこの避難場所にどう逃げたらいいのか、自分はどの班に属しているのか、水や食料はどこにあるのか、そうした情報が地域に浸透していなかったために混乱が生じました。いざという時にすぐに対応できる体制を整える必要がありました。

震災から２ヶ月経った５月に、自主防災会の再構築の取り組みが始まりました。班長８人と執行部６人で、今回の教訓を活かした様々な意見交換、今後の対応についての話し合いが行われました。災害が生じたら、まず安全な場所に逃げることが基本。そのことを明確にした組織づくりの一環として、「防災マップ」を充実させることにしました。震災時に流された広報車からの放送が聞き取りにくかったという声を反映し、マップに石岡市指定避難所を赤い囲みで大きく表示し、放送が聞こえなくても逃げる場所が誰にでもわかるようにしました。安全に逃げる経路については、実際に町を歩いて調査し、危険箇所や液状化した道路を記しました。２ヶ所に増設した防災倉庫や貯水槽の場所も加えました。緊急時の連絡方法や自宅避難の備えなど、このマップがあれば緊急時に対応できる内容にし、行政の支援を得て地区の全戸に配布することができました。

現在、自治会の会員は200世帯余りで、高齢者・子どもたちの見守り、防犯対策、防災マップに基づく避難訓練などの活動が活発に行われ、自主防災の意識の高さを感じます。「自分で守る、地域で守る」と、近隣の協力が不可欠という考えで一致しているのです。防災対策をさらに意識した「安心・安全な街づくり」への取り組みに励んでいきたいと思います。

**川田 豊**さん
**石岡市南台二丁目自治会 自主防災会 会長**

## 日頃の避難訓練の成果が表れた誘導お互いの絆を深めた経験をいかしたい

ホームの入所者の方々におやつを準備していた時でした。突然、下から突き上げるような大きな振動に襲われました。室内は、天井からエアコンの機器が垂れ下がったり、スプリンクラーが作動して水浸しになったりと、危険な状態でしたから、入所者たちを安全な場所に誘導することが急務でした。寝たきりの高齢者が多く、一人ひとりを車いすに乗せ、屋外に出ることにしました。3月とはいえ寒かったので、体が冷えないように毛布やブルーシートをできるだけ多く集めました。出勤していた職員は12人ほどでしたが、非常事態の中でも慌てることなく、落ち着いて行動できたのは、日頃の避難訓練の成果だと思います。それまでは月1回の訓練は多いのではと考えることもありましたが、地道におこなってきた積み重ねが、震災時の迅速な対応に役立ったと、訓練の大切さを改めて実感しました。

震災日の夜からは、損壊がほとんどなかったショートステイで利用していた建物で過ごすことにしました。狭いスペースに入所者50人分の布団を隙間なく敷きました。水は貯水槽のものを利用できましたが、電気が3日間使えなかったので、夜は真っ暗で寒さ対策が一番大変でした。灯油ストーブをいろいろなところから集め、皆さんの体が冷えないよう気を配りました。私たち職員は先の見えない張りつめた気持ちでお世話していましたから、地域の方々が食料を差し入れて下さったり、以前ここに勤めていた同僚たちが心配して手伝いに来てくれたりした時は、その温かい心遣いに涙したことを覚えています。

震災でホーム棟の建物は大きな損害を受けましたが、入所者の皆さんがケガひとつなく無事であったことは不幸中の幸いでした。震災から4年経った今も職員たちで、あのときのことを話します。二度と経験したくない出来事ですが、職員が力を合わせて困難を乗り切った経験は、互いの絆をいっそう強いものにしたことは確かです。介護の仕事に15年以上携わっていますが、この仕事は、職員同士はもちろん、入所者の方々との信頼関係が重要な柱だと考えます。みんなが自然と笑顔になれる、そんな職場環境に貢献できるよう努めたいと思います。

**岡野 和代**さん
**石岡市特別養護老人ホームのぞみ　介護主任**